

「国際交流都市日光の再発見—『足尾の歴史を生かした観光地づくり』を国際的視野から考える—」プロジェクト

事業代表者 重田康博（国際学部多文化公共圏センター副センター長）

構 成 員 アンドリュー・ライマン、高橋若菜（国際学部）

1. 事業の目的・意義

本事業は、「国際交流都市日光の再発見—『足尾の歴史を生かした観光地づくり』を国際的視野から考える」プロジェクトです。本プロジェクトは、「日光の魅力」を①国際観光開発、②国際交流、③環境学習、の3つの視点から再発見し、留学生と海外経験のある日本人学生の気づきによる「足尾の歴史を生かした観光地づくり」のためのフィールドワーク、シンポジウムを通じて提言を行い、日光に対して国際貢献・地域貢献していくことを目的とした。

今回のプロジェクトでは、国際交流協会の会員と留学生が共にオリエンテーションやフィールドワークを行うことで、双方が国際的な視点を養うことができるだけでなく、本プロジェクトで学んだことをそれぞれが地域に持ち帰り、在住外国人とのまちづくりや観光開発へつなげる狙いがあった。

最初に、日光市足尾の概要について説明する。

日光市足尾は、関東地方の北部、栃木県西部に位置し、足尾銅山や松木溪谷で知られている。足尾には、1610年銅山が発見されて以来鉱山開発が行われるようになり、1877年古河市兵衛が足尾銅山の経営を行うようになると、当時の明治政府の富国強兵政策を背景に鉱山事業と製錬事業は飛躍的に発展し、「足尾銅山」の町として知られるようになった。

その一方、銅山工場から排出される煙による大気汚染や渡良瀬川の洪水や製錬による廃棄物が平地に流れ込むことによる水質・土壌汚染が発

生し、「足尾鉱毒事件」など広範な環境汚染を引き起こした。1973年2月28日銅山は発見以来360余年で採鉱を停止し、その後「足尾銅山観光」などの観光地となっている。また、鉱山の伐採と煙害により荒廃した近隣の山々ではNPOやボランティアなどによる植樹活動と環境学習が行われている。現在足尾は、人口減と高齢化による過疎化が進行している。

2. 研究方法

- (1) 留学生・学生たちが日光市足尾（銅山坑内観光、足尾歴史館、松木溪谷、古河掛水倶楽部）において、フィールドワークを実施した。アンケート用紙を作成し留学生・学生によるインタビューを行った。
- (2) 留学生・学生たちは、日光市の連携先との共同作業により、地域の課題・改善点・今後の可能性を検討し、シンポジウムで発表した。
- (3) 留学生・学生たちは、「新しい発見」の内容についてインターネットなどを活用して具体的な提言・提案を行った。

3. 事業の進捗状況

- (1) 「オリエンテーション」12月3日（日）
場所：日光市足尾（場所：足尾行政センター）

日光市と学生間で、国際交流都市日光市の魅力と課題を検討し、新しい地域資源・観光資源の可能性などについて共同でオリエン

テーションを行った。

- ・プロジェクトの目的を確認（重田）
- ・フィールドワークの説明（重田）
- ・足尾地区についてプレゼン（山田功、高橋若菜）
- ・グループの目標設定（ライマン・アンドリュース）
- ・グループ分け・ワークショップ。



写真1：松木溪谷全体写真

(2) 「フィールドワーク」

学生は日光市足尾について紹介を受けつつ、フィールドワークを行いながら、本プロジェクトの調査として、足尾の魅力や課題などを関係者にインタビューをした。

「フィールドワーク①」11月11日（日）午後足尾歴史館、銅山坑内観光を全員で視察し、インタビュー調査を行い、足尾の歴史を学習し体感した。

「フィールドワーク②」：11月17日（土）

午前中全員で松木溪谷、古河掛水倶楽部を視察し、午後足尾地域で5グループに分かれて、インタビュー調査を行い、過疎地域におけるまちづくりと観光開発、環境問題について学習し



た。

写真2：銅山観光写真

(3) シンポジウム

12月15日（土）10時—13時 宇都宮大学
大学会館多目的ホール

「国際交流都市日光の再発見」のテーマによるシンポジウムを宇都宮大学大学会館多目的ホールで開催し、日光市足尾の地域資源・観光資源、環境問題について意見交換を行った。参加者は、日光市、ゼミ学生（アジア、欧米など留学生、海外経験のある留学生）など、約70名が参加した。

プログラムは以下の通りである。第1部では、最初に、山田功氏（足尾まるごと井戸端会議代表、日光市国際交流協会副会長）「足尾地区における歴史とまちづくり」、次に、高橋若菜氏（宇都宮大学国際学部准教授）「足尾銅山鉱毒事件の今日的意義」、の2名の講師が講演した。第2部では、宇都宮大学留学生によるプレゼンテーション「国際交流都市日光の再発見！」を行った。5グループがフィールドワークの調査結果を基に、留学生・海外経験のある日本人学生の視点から、国際交流都市日光市足尾の魅力、まちづくりと観光開発および課題について発表し、2人のコメンテーターがコメントをした。その後の質疑応答では、国際交流都市日光足尾の新しい地域資源や観光資源の可能性について活発な議論を行い、足尾のまちづくりと観光開発について宇都宮大学外国人留学生・海外経験のある学生と共に考えた。

4. 事業の成果

(1) 宇都宮大学と日光の共同事業として、日光市が有する地域資源、観光資源の発展について、足尾においてインタビュー調査を行い、外国人留学生・海外経験のある学生などの視点から、国際交流都市日光としてなすべき政策、方法、

展望が明らかにした。

(2)今回で日光プロジェクトは、4年目となり継続性のあるプログラムになった。留学生・海外経験のある学生が参加し、国際交流都市を目指す

日光の魅力を再発見した。

(4)日光市足尾が有する地域資源の発展について、

留学生の視点から国際交流都市日光としてなすべき「持続可能な観光開発プラン」の政策、方法、展望を明らかにした。

(5)留学生、海外経験のある学生などが、足尾歴

史館、銅山坑内観光、松木溪谷、古河掛水倶楽部などの足尾の地域・文化・歴史・観光・過疎・高齢化の現状について一層理解し、日光市国際交流会員、国際学部教員と共に協働作業を行いコミュニケーション力の向上を図った。特に、足尾まるごと井戸端会議代表山田功氏からは、過疎地である足尾のまつづくりのご苦労や宇都宮大学の高橋若菜教員から足尾鉍毒事件の問題を聞くことができたのは、留学生にとっても価値のあるお話だったのではないだろうか。

5. 今後の展望

本事業の今後の展望としては、以下の可能性が考えられる。

1 宇都宮大学と日光の継続的な共同事業として可能性

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター（CPMS）は、これまで日光市国際交流協会による交流事業「食から世界を考える」に協力し、2015年度は国際学部の外国人留学生（比較文化論演習：ライマン教員）、および留学経験日本人学生（卒業研究：渡邊教員）によって、栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業「外国人留学生と留学経験から見る日光の観光開発

プラン『世界遺産+1』を実施し、CMPSと日光市がこれに協力し、2016年度、2017年度、2018

年度は主催事業として、「国際交流都市日光の再発見！（通称日光プロジェクト）を実施した。

本事業の様に、大学と自治体が共同事業として協力

し合うことによって、大学の外国人留学生、留学

経験がある日本人学生、教員・職員、自治体の職

員、会員、商店街や旅館の地元の住民、地域のNPO、

地域おこし協力隊員と一緒に「顔の見える関係づ

くり」を行い、地域資源や観光資源を再発見し、提言や提案を行ったことは意義があった。

2 新しい地域と多様なアプローチの検討

今後の事業の可能性としては、日光市での新しい地域や新しいアプローチで事業を展開してい



くことが考えられる。候補地としては、日光東照宮の商店会の再開発、奥日光、江戸村などの地域が考えられる。新しいアプローチとしては、観光開発の他に、国際交流、遺跡・国立公園など留学生が外国人のための「観光モデルコース」を考え、日光の魅力を再発見し、そこに毎年入れ替わる留学生などの新しい視点や意見を取り入れることは大変意義があることであると考えている。

写真3：12月15日シンポジウムの様子
(於宇都宮大学大学会館多目的ホール)